～洛西からの一読～

今回のテーマは「他者を知るということ」

自分と全く同じ人間はいません。自分自身は唯一無二の存在です。でもわかってはいても気になる他人。自分とは全く異なる考え方をするあの人、この人がどうしても気になってしまう。でもその興味は自分自身を知るきっかけになるかもしれません。

© 中村颯希／一迅社

ふつつかな悪女ではございますが～雛宮蝶鼠（すうぐうちょうそ）とりかえ伝～

中村　颯希/著　ゆき哉/イラスト　一迅社

ここは詠国（えいこく）、という広大な領土を誇る古の中国のような国。国内の有力な五家は、有能な統治者を絶やさぬよう協働し、「雛宮（すうぐう）」なる宮を構えた。その宮には次期皇帝の妃候補たる「雛女（ひめ）」と呼ばれる娘たちが集められ、次期妃育成のための教育が施されていた。その中に、異彩を放つ雛女が二人。片や、宝石のように整った容姿を持ち、学に秀で才にあふれ、心根も善良であるが故に雛宮内で広く慕われ尊敬を集める黄玲琳（こうれいりん）。ついたあだ名は「殿下の胡蝶」。片や、人には厳しく才には乏しく学には疎く、容姿も優れないが故の嫌われ者、朱慧月（しゅけいげつ）。ついたあだ名は「雛宮のどぶネズミ」。そんな慧月は当然のごとく玲琳をねたんでいる。乞巧節（たなばた）の夜、大きなほうき星が空を横切ったその時・・・。二人は入れ替わった。玲琳は慧月に、慧月は玲琳に。すべては慧月の怪しい術によるはかりごとである。慧月の願いどおり入れ替わりの生活が始まるが、玲琳の体での生活は思い描いたものとは全く違っていた。他者を正に、「体感」することによって慧月は今まで知り得なかったことを知り、それまでとは全く違った感覚の中で周りの人間を違う視点で捉え、見えていなかった世の中を見る。その過程で徐々に他者を理解し、同時に他者の目を通して自分を見直し、自分自身を知っていくのである。他者を知ることは自分自身を知ることでもある。古より繰り返し書かれる「入れ替わり」の物語は、他者と自分自身への尽きせぬ興味の現れなのだろう。

フィンランドはなぜ「世界一幸せな国」になったのか

岩竹　美加子／著　幻冬舎

所変われば品変わる、と言うように日本と外国では様々な物事の仕組みが違っていたりするものであります。わたしはそういった事物・事象の違いを見聞するのが好きなのですが、書物などである国のシステムが地上の楽園のように書かれていたとしても、それはその国が絶対的な楽園であるというわけではなく、単に一長一短があるということであったり、自分に合うか合わないかの違いと捉えています。本書に取り上げられた、国連による世界幸福度ランキングで 2018 年から 5 年連続 1 位となったフィンランド、さてどのような仕組みを持っているのかと読み始めたところ、数々の日本との相違が発見され、非常に興味深くページを繰ることになりました。例えば我が国の国民の義務は、教育・勤労・納税ですが、フィンランドでは労働は義務ではなく、かの国が義務としているのは納税と国防です。充実した社会保障は、高いと言われる税金と共に、国民すべてに与えられた IDナンバーによる管理に支えられているようです。我が国にもマイナンバーが導入され、普及促進が図られていますが、未だに登録数はあまり急激には伸びていないようです。フィンランドの社会システムや人々の意識のあり方は日本との違いが大きすぎて、もしある日突然フィンランドのシステムが日本に導入されることになったならその時、わたしたちはどのような反応を示すのだろうと考えることは興味深いことでした。そして考えた結果、「世界一幸せな国」のシステムであっても、案外導入に抵抗を示す人が多いのではないかという感を抱きました。同時にまたその理由を考察するに当たっても、様々な日本の現状が見えてくるような気がしました。他者を知ることは、自分自身を知ることであるということは、人だけではなく、国や社会にも言えるようです。